

ゆうだい21 Q&A

Q1. ゆうだい21の特徴は！？

→国立大学法人初の農家普及向け水稻品種、宇都宮大学オリジナル米『ゆうだい21』。この品種の最大の特徴は食味です。モチモチした独特の粘りがある食感を持ち、食味がコシヒカリと同等以上の21世紀の新しいお米です。冷えてもその特性が失われません。また、電子レンジ等で再加熱した際に独特の食味が再現されやすい品種です。このため、おにぎりやコンビニなどのチルド弁当に向いているとされます。残念ながら全国の消費者には品種名が必ずしも浸透していませんが、その独特の食味から全国の米卸業者で知らない人はいないといっているほど話題性がある品種です。全国の食味コンクールでもしばしば上位入賞を果たしています。

Q2. どのような地域で栽培可能ですか！？

→コシヒカリの栽培地域とほぼ同様です。昼夜の寒暖差が大きいほど良質米生産が可能です。ただし、6月に入っての移植では収量が低下しやすい傾向があるので、稲・麦作など二毛作地帯の後作には向きません。遅くても5月中旬に移植することを心がけてください。これまでの研究結果から、おすすめは5月半ばまでの移植です。

Q3. 種子の漬種（芽出し）の際に気を付けることがありますか？

→ゆうだい21は採種した年の天候等の影響により、他の品種より種子の休眠が深くなる傾向があります。このため、芽出しは他の品種よりも少し長めに行ってください。このことで播種時の芽の揃いがよくなります。

Q4. 苗作りについて

→育苗期間の高温に注意することが他の品種以上に大切です。過度な高温は発芽不良・ムレ苗・徒長苗・病害の発生を助長します。ハウス内育苗では温度が30℃を超えると予想される場合は十分な換気を行ってください。特に出芽直後は被覆資材の掛け過ぎにより、徒長を招きます。また、播種後3週間を過ぎるころから、他の品種に比べて苗が伸びやすくなる傾向があります。徹底した温度管理により、充実した苗を育てることができます。移植時期の設定に際しては、育苗期間が延びすぎないように計画を立ててください。

Q5. 耕起・代掻きについて

→ゆうだい21は長稈で藁量が多いので、藁残渣の分解を促進させるために、収穫後の早い時期でのすき込みを実施してください。加えて春先に丁寧な碎土を心がけることも大切です。特にゆうだい21を連作する場合には藁残渣が残りやすく、代掻きや移植精度の低下につながるがあるので、前記の対策が有効です。

Q5. 植え付けのポイント

→植え付け株数は㎡当たり15～18株（坪当たりでは50～60株）程度とし、植え付け本数は1株当たり3本程度を基準とします。過度な密植・疎植に注意してください。極端な疎植では穂数不足を招き、収量が不足がちになります。

Q6. 施肥量について

→ゆうだい21の施肥量は地域内のコシヒカリの施肥量に準じます。一発タイプの肥料を使用する場合には、生育後半に肥効が出る成分比率が高い製品を施用することが望ましいと思われます。

また、分施する場合においては、施用時期が早すぎるとコシヒカリと同様かそれ以上に上位節間の伸長を招きやすく、倒伏によって受光態勢が悪化する傾向があります。適切な追肥量と追肥時期の見極めは、ゆうだい21多収のポイントですが、追肥時期の生育状況（葉色・莖数・草姿）に応じて適切に施用することが大切です。なお、一発タイプの肥料を使用したからといって、追肥をすることはできません。最近の夏は高温傾向にあり、肥料の溶出が早くなりがちで、生育後半の肥料切れが認められる場合があります。このような時には追肥が高品質多収のために有効です。

Q7. 移植後の初期生育が悪く、心配です。

→ゆうだい21は他の品種に比べて、初期生育が緩慢な傾向があります。このため、移植後1か月くらいはなかなか茎数が増えず、見た目には寂しい田んぼの様子になりやすいです。ただし、ここが我慢のしどころです。移植後1か月をすぎることからすすくと生育し、茎数が増えていきます。ここで我慢しきれずに肥料をあげると、過繁茂になりやすく、ひいては倒伏の原因にもなります。全国でみられるゆうだいの栽培失敗事例は、施肥時期と施肥量の判断の誤りによる倒伏ですが多くを占めています。

Q8. 中干しは必要ですか！？

→ゆうだい21は分けつ期以降に有効茎数が確保され次第、葉色や草姿に応じて適宜中干しを実施してください。目標茎数は25～30本/株程度です。出穂期前後は湛水状態（深水）の維持を心掛け、落水は他の品種よりなるべく遅くして、収穫期まで田面を乾かしすぎないようにして、十分に登熟させて下さい（Q11もあわせて参照ください）。

Q9. 出穂がばらばらで、穂揃いが悪い気がしますが？

→これもゆうだい21の品種特性からくるものです。特に心配する必要はありません。通常の品種はおおむね1週間で穂が出揃いますが、ゆうだい21は2週間程度かかることもあります。このため、当然のことながら穂ごとの成熟期もばらばらになりやすく、収穫時期をどのように見極めるかが大切になります。この点については、この後に出てくるQ11もご覧ください。

Q10. 病害について

→ゆうだい21はいもち病に関して、葉いもちから穂いもちへの移行が少ない特徴がありますが、発生状況に応じて適宜防除を行うことが必要です。また、縞葉枯れ病の発生が懸念される地域では、抵抗性品種ではないので、本病を媒介するヒメトビウンカの防除のために箱施用薬剤の施用に加え、6月上中旬の本田防除を実施してください。

Q11. 刈り取り適期について

→ゆうだい21は収穫適期幅が広く、刈遅れによる品質低下が少ない特徴があります。登熟が緩やかに進むので、帯緑色籾歩合10%未満（青籾率）を目安に収穫を行ってください。出穂期からの日平均気温の積算値では1100～1200℃日になります。関東地方平野部のコシヒカリでは同様に1000℃日ですので、収穫時期にもよりますが、コシヒカリに対して4、5日から1週間程度遅く収穫が可能で、遅くに出た穂が十分に稔るまで待つから収穫作業に入ってください。このためにも早すぎる落水は控えてください。早刈りは未熟米が増え、収量低下の一因になります。これまでの失敗事例からも早刈りは厳禁です!!

Q12. くず米が多い気がしますが？

→ゆうだい21は米粒自体は大きいのですが、粒厚が薄い特性があります。このため、日照不足や低温など登熟条件が十分ではない年にはくず米が増える傾向にあります。また、天候に恵まれた年でもくず米の割合は他の品種よりも多くなりがちです。この点は品種特性によるところが大きいため、栽培技術ではカバーしきれない部分もありますが、有効な技術対策として、Q6の施肥管理（特に追肥が重要です）によって稲の栄養バランスをよくして登熟を良好にすること、さらにQ11の適期収穫を励行することによって、なるべく登熟期間を確保することが挙げられます。また、倒伏は登熟条件を悪化させ、適期収穫の妨げにもつながるので、極力させないことも重要なポイントです。